

花輪台貝塚土偶をみる

吉田 泰幸

はじめに

茨城県花輪台貝塚出土土偶は、南山大学人類学博物館所蔵資料の中でも、著名なもののひとつである。教科書の副読本など、各種出版物への掲載依頼等も多い。その大きな理由は、非常に古い時期の土偶であるとともに、土偶としては稀な、欠損のない完形の優品だからだろう。専門的な研究上も、当該期の土偶をあつかう上では避けてとおることはできず、多くの論考で花輪台貝塚土偶を目にすることができる。

こうした従来の知名度が高じて、花輪台貝塚土偶は文化庁を通じて、大英博物館でおこなわれた“The Power of DOGU”、本稿執筆時点で東京国立博物館にておこなわれている「国宝土偶展」に出陳されることになり、長期に貸し出されることになった。

長期貸し出しが決定した際、人類学博物館の運営委員でもある南山大学人文学部の大塚達朗教授より、花輪台貝塚土偶の実測図作成を強く勧められた。長期の貸し出しに伴い、破損の可能性もないとは言えないため、記録をとっておいてほしいとのことであったが、同時に、花輪台貝塚土偶は、写真とそれから起こしたとおぼしき実測図は広くみられるものの、詳細な実測図は案外にみられない、ということも理由のひとつであった。

破損に備えた作図、ということであれば、万が一の時の復元性を鑑み、図化技術の行

きつく先に訪れるであろう 3D モデリング等が理想なのであろうが、当然のことながら現時点ではそれは望めない。したがって本稿でも従来どおりの技法に沿った 2D の実測図を提示するわけだが、それをもって復元性が高いと自負するつもりもなければ、作図の美しさを競う争いに参画するつもりもない。ただこれをよい機会ととらえ、実測図を補う形で多方向からの写真を提示することによって復元性をできるかぎり高め、観察所見を記し、併せて今日的に花輪台貝塚土偶を紹介し、検討する意義や方法を考察したのが本稿である。

土偶をめぐる言説—“The Power of DOGU”と「国宝土偶展」—

今回花輪台貝塚土偶が出陳された大規模な土偶展の開催は、土偶をめぐる言説全体をレビューするにもいい機会であり、大英博物館・東京国立博物館の両展示会の図録を素材にそれをおこない、そのうえで今日的に花輪台貝塚土偶にどうアプローチするかを探っていきたい。

筆者は大英博物館における“The Power of DOGU”を観覧することはできなかったが、東京国立博物館での「国宝土偶展」を観ることはできた。後者には前者の展示風景も写真パネルで紹介されており、若干雰囲気推察することはできたが、両展示の比較は不十分なものになりかねない。それ

もあって、本稿では両展覧会の図録に焦点を絞り、現在の土偶をめぐる言説を比較検討したい。

両博物館から展覧会名と同一タイトルの図録が刊行されている。両図録に共通するのは多くの美しい写真図版と出展された土偶の基礎データ（出土地、変遷図の提示を含む）である。写真図版の中では花輪台貝塚土偶は1頁を割いて掲載されている。両展覧会/図録は想定される観覧者/読者も異なるためか、必然的に写真図版の合間に収録された論考の類は方向性が異なる。あくまで筆者の私見として大雑把に両図録の特徴を記せば、“The Power of DOGU”は土偶をめぐる言説の多様性に開かれた（あるいは開かれすぎた？）書であり、「国宝土偶展」は従来のストイックな研究姿勢に貫かれた（あるいはそこに留まりすぎた？）書、との印象をもった。無難に言えばどちらも一長一短で、その背景には欧米・日本間の研究動向の差異があるのだろう。以下に短いレビューを試みる。

“The Power of DOGU”は土肥孝・原田昌幸両氏による英文論考も収録されているが、筆者が上記のような印象をもつに至った欧米の研究者の論考に絞ってとりあげる。

それらはSimon Kaner氏による土偶研究史概観と土偶概説（Kaner 2009）、Douglass Bailey氏による北海道函館市著保内野土偶の解釈考古学的研究（Bailey 2009）、Nicole Coolidge Rousmaniere氏による土偶の文化資源学とも言うべき論考（Rousmaniere 2009）の3つで構成されている。

Simon Kaner氏による土偶研究史概観と土偶概説は、日本における近代考古学導入

以前の江戸時代にまでさかのぼって土偶研究史をレビューしつつ、土偶の特徴と関連資料、注目される遺跡、出土例の紹介がなされている。最後に川畑秀明・松本直子両氏による土偶の顔に関する感性考古学的アプローチ（川畑・松本 2007）が紹介されているあたりに、ポストプロセス考古学以後の研究動向—解釈の多様性を認めつつも、現象と解釈の間には、両者を媒介する理論もまた必要—をフォローする姿勢がみえる。

Douglass Bailey氏による北海道函館市著保内野土偶の解釈考古学的研究は、著保内野土偶の出土状態とその形態的特徴から、この土偶の往時における使用方法を解釈したものである。著保内野土偶は中空のつくりで、両足の途中になぜか結合部があるが、そこには孔がある。この部分に解釈上も注目している¹⁾。その解釈に納得がいくかどうかの判断は実際の文章に目をとおした方にゆだねたいが、その特徴を記せば、概説書などを引用しマクロなコンテキストを注視しているものの、主にミクロなコンテキストに着目した解釈と言える。土偶に関する複数事例から導かれたある種の法則性、つまり「縄文」というかなり大きなコンテキストよりは下位レベルにありつつも、土偶に関してのマクロなコンテキストとはあまり連関を持たないまま解釈がおこなわれることには、戸惑いをもつ向きもあると思う。上述した、現象と解釈を架橋する理論が不在にみえるからである。ただ、こうした言説にも開かれていること自体が、欧米の考古学がたどった道でもあり、本図録の特徴なのかもしれない。

Nicole Coolidge Rousmaniere氏による土

偶の文化資源学とも言うべき論考は、主に日本の美術・文芸の世界で土偶がどのように受容されたか、ということに加えて、マンガなどのサブカルチャーの中での取り扱いにも言及している。土偶という考古資料が考古学の枠を超えて、文人や芸術家のアイデンティティ形成の場のみならず、文化産業の中で資源化する様相を記述しているとも言える。こうした論考は広義には考古学についての学、それをめぐる言説についての学、という「メタアーケオロジー」とでも呼ばばよい領域に属するのであろう。メタ位置にたつのに恰好の方法は外部に立つこと、とすれば、こうした論考が日本考古学界の中からは生まれなかったのは（丹念に探せばあるのかもしれないが）、必然だったのかもしれない。

『国宝土偶展』は冒頭に原田昌幸氏の土偶造形と祭祀の関係性を説いた論考（原田2009）、末尾に井上洋一氏による土偶の出土状態からみた精神世界に関する論考（井上2009）を軸に、間に原田昌幸氏による大英博物館と坪井正五郎の関係・切手や駅になった土偶について、阿部千春氏によるCTスキャンの紹介、品川欣也氏による土偶にみられる文様と関連する製品（仮面や動物形土製品）の解説というコラムが配されている。

切手や駅になった土偶の紹介という、原田氏による土偶の文化資源学の萌芽とも言えるコラムとCTスキャンについてのコラムを除けば、語り口は専門的研究者以外の読者を想定しつつも、文章にはいわゆる考古学上の専門用語を数多く用いながら自身の研究成果を述べる、という点²⁾が共通しているように感じられた。

その他、共通している点は上述の Douglass Bailey 氏の文章と対になるもので、土偶の出土状態を検討するにも、土偶の造形そのものを検討するにも、複数事例の集成を基礎的な方法としつつ、土偶に関して時期的・地域的にも広い、マクロなコンテキストをもとに発言していることである。後者の典型例は、その結果が土偶型式の提示という形でなされている。この土偶の型式論が、土偶の存在という考古学的現象と解釈を架橋する理論としてどこまで有効かは別にして、その視座は、土偶を「科学的」に、「客観的」に観察する、という姿勢で一貫している。

Douglass Bailey 氏のように半ば往時の人々と同化し、すでにはいない人々の内側から土偶を眺めるような視座や、土偶を研究という営み以外にも人々が多様に資源化する様子を一步引いて眺める Nicole Coolidge Rousmaniere 氏のような視座は『国宝土偶展』所収の論考にはあまりみられない³⁾。こうした両者の視座の多様性/視座の単一性が“The Power of DOGU”/「国宝土偶展」両図録の差異としてあらわれていると考える。

これはあくまで筆者の整理による両者の「差異」で、両者を価値判断によって分別しようとは思わない。ただ、今日的に花輪台貝塚土偶の紹介・検討をするには、視座の多様性を意識せざるを得ないと考えている。以下でその方向性を模索したい⁴⁾。

花輪台貝塚土偶について

前節の“The Power of DOGU”と「国宝土偶展」両図録所収論考の整理から、土偶への視座には1:客観的な視座、2:往時の人々

に同化せんとする視座（こうした解釈を思いつきに終わらせないために、いわゆる認知考古学なるものが提唱されたのがポストプロセス考古学以後の展開であろう、と筆者は理解している）、3：土偶をみる人を見る視座、の三者があり、『国宝土偶展』は第一の視座が前面に出ており、“The Power of DOGU”は3つの視座それぞれが際立っている、と筆者なりに整理した。以下は、花輪台貝塚土偶を詳述するにあたってその3つを意識すればどうなるか、というケーススタディになる。

その前に、花輪台貝塚土偶の基礎的データを示す。

花輪台貝塚土偶は Gerald J. Groot 神父が千葉県市川市にて第二次大戦後の短い時期に運営していた日本考古学研究所⁵⁾の発掘調査によって出土したもので、花輪台貝塚発掘調査の報文は吉田格氏による（吉田格 1948）。土偶は「貝層から出土した」（同 29 頁）との記述があり、続けて「頭部、手を簡単に作られ二つの乳房があり、腹部はややふくれている」（同）と、形態上の特徴を述べている。

今回、貸出前に作成した実測図が第 1 図である。改めて計測した結果は高さ 4.9 cm、最大幅 3.2 cm、最大厚さ 1.4 cm、重さ 12.86 g という、土偶全体で見ても非常に小さな部類に入る土偶である。特筆すべきは、土偶は破損して出土することが多いが（これが故意破壊説の根拠になっている）、本土偶には目立った欠損がないことである。そしてその形態的特徴について、吉田格氏の短い記述以上にさして付け加えることはないが、この至ってシンプルな形態の土偶を先に整理した 3 つの視座から詳細に

眺めてみたい。

1：客観的な視座

花輪台貝塚は戦後間もない時期という、研究史的に古い段階に出土し、かつ完形品故に土偶型式の標識資料となっている。

「国宝土偶展」にも寄稿している原田昌幸氏が本土偶と同様の特徴を有する一群を「花輪台土偶型式」と命名している。その他いくつかの土偶型式とともに「撚糸文系土偶様式」なるものを形成する、としている（原田 1997）⁶⁾。こうした「様式」と「型式」を入れ子関係として理解することには様々な意見がありそうだが、その点は多くの型式論者に譲り、本稿ではこうした土偶型式の設定にまつわる問題点について述べたい。

土偶型式は土偶の形態的な特徴をもとに設定される。原田氏は花輪台土偶を典型例とする土偶型式の特徴を「トルソーを造形要素の全てとする」としている。そしてこれが造形に確たる意識がある証左であり、古い時期の土偶を「古拙土偶」という、造形の優劣を想起させるような名称で呼ぶことを批判している⁷⁾。しかし、土偶型式なる概念は、ある土偶型式が後続する時期や他地域の土偶型式に影響を与え……という概念操作に向かう。そこでも形態的特徴の類似からそうした説明がなされるのだが、それをすればするほど、古い時期の土偶は結果的に造形上の発達を果たす前のもの、という理解を増幅させてしまう、という問題がある。

「古拙土偶」という名称に対する違和感は筆者も共有するものの、土偶型式という概念はかえって、シンプルな形態を「古拙」

と呼びうる姿勢を強めることもあり、それに対する批判になり得ないのではないだろうか。それは土偶全体の型式論において、土偶型式の多様性が土偶を用いた祭式の多様性、という説明がなされ、土偶に対する一律な解釈に対する批判がおこなわれるのだが、祭式の内実には踏み込むことを迂回し続ける土偶型式論は土偶解釈の一律性の批判になりにくい、という構造に類似しているように思えるのである。

2：往時の人々に同化せんとする視座

土偶型式論は専ら「土偶とその情報」プロジェクトの中で洗練された一面がある。こうした活動自体を土偶研究上は無意味としたのが渡辺仁氏で、氏は民族誌を渉猟した結果、土偶の特質のひとつは、その顔や手足の不在に代表される怪異性にある、とした（渡辺仁 2001）。形態に対して往時の人々が託した意味をよみとる試みだが、民族誌渉猟の上の立論でありながらも、結果として出された、怪異性が土偶の本質のひとつ、という結論には、多くの括弧付きの科学的・客観的視座に立つ土偶型式論者が同意しないであろうし、非科学的、との批判も予想される。個人的には、この説の援用は花輪台貝塚土偶に対して「（『頭部、手を簡単に作られ』と言うよりは）手足も顔もない、古拙ながらも土偶の本質がすべて詰まっている」との評価が与えられそうで、シンプルな形態の土偶を言葉上の意味だけで「古拙」と呼ぶ姿勢に対する批判にもなりうると思うのだが、それでも土偶型式論者との溝は埋まらないであろう。そもそも視座の差異が、根底にあるからである。

そうした困難さがあっても、花輪台貝

塚土偶の微視的な観察結果から、往時の人々の視座の在り方を検討したい。ここでは、吉田格氏が報文中に記した、「腹部のふくらみ」について検討したい。縄文時代の土偶はほとんどが女性像であることは、江坂輝弥氏が指摘している（江坂 1960）。明確な男性像土偶も、北海道の続縄文期遺跡等から出土しているが、この傾向は今も変わらない。その後の水野正好氏や、神話学者の吉田敦彦氏による土偶の意味論（水野 1974、吉田敦 1986）も、「女性像としての土偶」は「出産」、広く言えば「生産・再生産」のメタファーとして機能していることが前提の議論である。吉田格氏の報文はそのような説が定着するはるか以前に書かれたものであるにも関わらず、女性像に出産を想起させる「腹部のふくらみ」をみているが、改めて花輪台貝塚土偶をみてもどうだろうか。微視的な観察は、土偶の作り手の意図を追体験することを少なからず含んでいることを考えれば、実測のための観察自体、往時の人々に同化せんとする視座となっている。

花輪台土偶全体は、表面に細かな凹凸がある。各種論考にみられる写真からおこしたとおぼしき実測図では、あたかもなめらかな表面をもつかのようだが、その印象とは反対である。特に正面の胸部付近と、背面にそれが目立つ。胸部を作り出した際の痕跡、整形のため撫で付けた粘土の細かな剥離の痕か、とも思え、実測図には輪郭線の中に多数の描線が入ることになった。問題の「腹部のふくらみ」についてだが、確かに意図的にふくらんだ様子を表現したと見えないことはない。しかし、多方向から撮影した写真（写真1）をみると、その部分

は細かい凹凸の一部でしかないのではないかと、思えるものもある。

土偶にはしばしば明瞭な腹部のふくらみが表現されることがあり、それが「再生産」のメタファーとなり、土偶の故意損壊説と結びついた時には、最も重要な特徴として重視される。原田氏は氏の言う「初期土偶」には明瞭な毀損行為は認められない、としている。そうした行為が普遍化するのには縄文中期に分割塊製作法が定着してから、ということなのだが、その当否はともかく「初期土偶」も大半は欠損して出土するのが常であり、その中でも完形であることに花輪台貝塚土偶の特徴がある。そうすると、その造形に往時の人々が「腹部のふくらみ」を託したかどうか、ということはこの土偶を見る際に、重要な論点と考えられる。

しかし、この小さな土偶にそこまでの含意の可能性をみること自体、のめり込みすぎなのかもしれない。ここで一歩引いた視座の検討に移ることにしたい。

3：土偶をみる人を見る視座

花輪台貝塚土偶は、各種媒体への掲載に関する問い合わせも多い。こうした問い合わせに対しては、近年博物館では逐一文書でのやりとりがおこなわれ、さらに手続きの体系化が試みられているが、過去においては必ずしもそうではない。花輪台貝塚土偶が登場したメディアと、その際のやりとりの記録がアーカイブズとして整備されていればよかったのであろうが、それは今後の課題である。したがって本土偶資源化の様相すべてを把握することは現状では難しい。本稿では筆者が散見したものの中で、興味深い事例のみ、とりあげる。

Nicole Coolidge Rousmaniere 氏もとりあげたマンガは、その性質上わかりやすくヴィジュアル化しなければならないが故に、時に功罪相半ばし、製作者個人、あるいは時々の集合的思考の先鋭化した表象と捉えることができる。そこで本稿でもマンガをとりあげたいが、悉皆調査は上記の理由で現時点では不可能なので、筆者の目にとまったもののみとりあげる。と言っても1例のみで、石ノ森章太郎の『マンガ日本の歴史 46—縄文時代の始まり—』（石ノ森 1993）⁹⁾である。その最終ページに、花輪台貝塚土偶が登場している（第2図）。そこでは花輪台貝塚土偶は縄文時代の始まりを告げる象徴的なものとして掲載されている。頁大の大コマの上部、「日本列島の人々の心」と始まった文章が、いつの間にか「日本では」、「日本型」となっていることに違和感を覚える向きもあると思うし、実際にこうした言説自体が研究対象になりうるだろう。

近年、「縄文時代」なる概念への疑念、解体への志向、縄文時代に関わる言説の問題点が指摘されている。その中でも、「日本列島」を所与とする「縄文文化」は文化概念として妥当か、という問いは、ある時点から継続的におこなわれており、生態学、およびそれを方法論的に取り入れている考古学研究者からは植生の多様性から⁹⁾、縄文土器研究からは文様帯系統論への疑義から¹⁰⁾、という具合に多方面からなされている。縄文時代をめぐる言説を外部から観察しつつも、そこに潜む問題点に対して正面からあつかった論考も近年散見される¹¹⁾。そこでは専ら広義にも狭義にも研究者とされる人々の言説が主に俎上に載せられる

が、その対象を上記したようなサブカルチャーにまで拡大することは、後発の学問である文化資源学の基盤整備のためにも、無為ではないと考える。

おわりに

以上、今日的には土偶を複数の視座からみるのが適当と考え、その実践を当館所蔵の花輪台貝塚土偶で試みた。本稿は作図を大塚達朗氏から勧められたことに端を発する。それがなければ、本館所蔵資料でありながら、こうして花輪台貝塚土偶に向き合うことはなかったであろう。記して感謝したい。

筆者の土偶研究の整理等に対しては、研究者によってまた違った意見があり得るであろう。そして博物館資料であるかぎり、観覧者の目に供されることが第一義である。「国宝土偶展」終了後、花輪台貝塚土偶が人類学博物館に戻ってきてからは、観覧者・研究者の多様な視座に開かれ、さらに語られ続ける対象であることを期待したい。

註

- 1) 「国宝土偶展」では、この孔の部分は、映像ガイド等も含め、焼成時の空気の抜け道、という土偶の製作上必要だったことを強調している。それでは他の中空の土偶に同様なものがないことが説明できないと思うが、かといってBailey氏のような解釈に傾斜する研究者も少ないであろう。
- 2) 「国宝土偶展」の音声ガイドも同様の特徴—語り口は専門研究者以外を意識しているが、そうした人々がおそらく初

めて耳にした時には理解不能な専門用語が多用される—を有していた、というのが筆者の私見である。考古学の外部に届けることを意識、あるいは要求されつつも、内部の目を過剰に意識する、あるいは意識させられることが、このような作り手のアンビバレンツを感じさせるものが生み出される原因ではないかと思う。筆者はある博物館で小学校高学年向け、というターゲットが明確な「土偶をつくろう」という企画で土偶の解説をした際には、「土偶は女の人で、人でないような顔をしている。そういうものをつくれれば土偶になる」とだけ説明したが、これとは反対の、不特定多数に届けることが前提の展示の場においては、上記のような問題に突き当たるのはやむを得ない。展覧会の期間中、不特定多数向けとは異なるメッセージを伝える場の確保が、展覧会というイベント共通の課題であると思う。

- 3) 原田氏の、切手や駅になった土偶についてのコラムは異なる視座の萌芽と言える。
- 4) 展覧会の主体をなすのはあくまでも展示であり、その点について若干の補足として、筆者が受けた印象を述べたい。“The Power of DOGU”は観覧できなかったのも、「国宝土偶展」についてのみになる。「国宝土偶展」は周辺事象の詳細な解説等は図録、音声ガイドに移管し視覚的には目立たないようにしており、展示自体は土偶1点1点が美術品のように展示された美的空間を形成し、感性への訴えかけを重視し

た展示にみえた。ただ、展示は空間、予算、学芸員主体型かパッケージ型か、等さまざまな条件の上に成立するであろうから、展示がどこまで展示企画者の意図を再現したものかわからないし、上述の印象も企画者の意図と照らし合わせてどれほど妥当かはわからない。

- 5) 日本考古学研究所の詳細は(領塚 1996)を参照。
- 6) 土偶型式は新例によって再構築される可能性が常にある。古い時期の土偶のように、例数が少なければなおさらであろう。近年、千葉県小屋ノ内遺跡において、盲孔を有しつつも、腕とおぼしき表現をもつ例が出土している(古内 2006)。原田氏の言う「木の根タイプ」の特徴を持ちつつ、花輪台貝塚土偶のような身体フォルム以外に、身体の一部?が表現された例である。
- 7) その結果「初期」土偶と命名している。
- 8) 石ノ森章太郎作、とは言っても、関係者は多数におよぶ。クレジットされているだけでも、原案は春成秀爾氏、脚本として長谷部利朗氏、時代考証として高田俊男、小泉和子、玉井哲雄各氏、監修として児玉幸多氏である。実際の作画体制、またこれらのオブザーバーがどの程度の関わりだったのか等、検証すべき点は多いが、結果としてあらわれた作品のみをここでは問題としたい。
- 9) 照葉樹林文化論と対をなす形で出された佐々木高明氏によるナラ林文化、市川健夫氏らによるブナ林文化、渡辺誠氏による縄文前・中期の九つの小文化

圏などが挙げられる(佐々木 1993、市川 1981、渡辺誠 1974)。

- 10) 大塚達朗氏が繰り返し発言している。縄文時代研究者を自認する多くの人が関わっている縄文土器研究内部から、当該研究に大きな足跡を残した山内清男氏の提唱する文様帯系統論に対する批判という形で提起された(大塚 2000)、という点は関連諸科学の、あるいはそれを取り入れた形での発言よりも大きな影響力を有すると思われる。
- 11) 民俗学者からは(菅 2010)、弥生時代・社会考古学・理論考古学研究者からは(溝口 2010)が直近の検討例として挙げられる。

引用文献

- Bailey, Douglass. 2009. The Chobonaino DOGU: Understanding a Late Jomon Figure from Hakodate. *The Power of DOGU*, London: The British Mueum, 60-68.
- 江坂輝彌. 1960. 土偶. 東京: 校倉書房.
- 古内茂. 2006. 四街道市小屋ノ内遺跡(2)—縄文時代～中・近世編—. 千葉県教育振興財団調査報告, 557.
- Kaner, Simon. 2009. Encountering DOGU. *The Power of DOGU*, London: The British Mueum, 24-39.
- 原田昌幸. 1997. 発生・出現期の土偶総論. 土偶研究の地平—「土偶とその情報」研究論集(1)—, 東京: 勉誠社, 217-269.
- . 2009. 土偶の造形表現と祭祀の“かたち”. 国宝土偶展, 東京: 東京国立博物館, 6-11.
- 市川健夫. 1981. 日本におけるブナ帯文化の構図、地理, 26-4, 11-19.

- 井上洋一. 2009. 土偶の出土状態からみたその役割と縄文人の精神世界. 国宝土偶展、東京：東京国立博物館、117-120.
- 石ノ森章太郎. 1993. マンガ日本の歴史 46—縄文時代の始まり—. 東京：中央公論社.
- 川畑秀明・松本直子. 2007. 土偶の顔における表情および印象評価の測定—感性考古学的アプローチ—. 電子情報通信学会技術研究報告 HIP ヒューマン情報処理、**107(369)**、79-84.
- 溝口孝司. 2010. 「縄文時代」の位置価. 縄文時代の考古学 12—研究の行方、何が分からなくて何をすべきか—、東京：同成社、97-111.
- 水野正好. 1974. 土偶祭式の復元. 信濃、**26-4**、12-26.
- 大塚達朗. 2000. 縄文土器研究の新展開. 東京：同成社.
- Rousmaniere, Nicole Coolidge. 2009. Rediscovering DOGU in Modern Japan. The Power of DOGU, London: The British Museum, 71-82.
- 領塚正浩. 1996. ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所—失われた考古学史を求めて—. 鎌ヶ谷市史研究、**9**、35-54.
- 佐々木高明. 1993. 日本文化の基層を探る—ナラ林文化と照葉樹林文化—. NHK ブックス：東京.
- 菅 豊. 2010. 民俗学と考古学の正しい別離—縄文言説の構築性—. 縄文時代の考古学 12—研究の行方、何が分からなくて何をすべきか—、東京：同成社、151-160.
- 渡辺仁. 2001. 縄文土偶と女神信仰. 東京：同成社.
- 渡辺誠. 1974. 縄文人の自然環境に対する適応の諸相. 第四紀研究、**13-3**、160-168.
- 吉田敦彦. 1986. 縄文土偶の神話学. 東京：名著刊行会.
- 吉田格. 1948. 茨城縣花輪臺貝塚概報. 日本考古学、**1-1**、27-33.

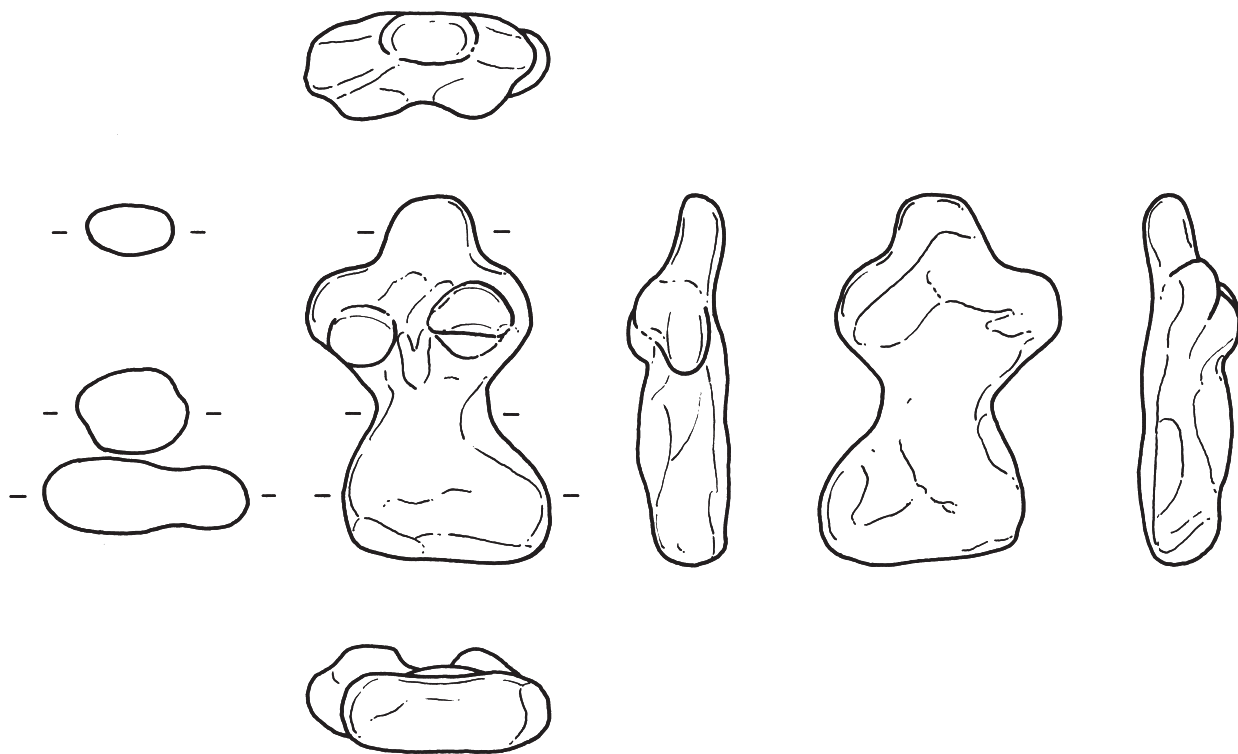
(金沢大学博士研究員)

Dogu from Hanawadai Shell Midden

YOSHIDA Yasuyuki

Two exhibitions were held at the British Museum and Tokyo National Museum from September 2009 to February 2010 with the same title in English: 'The Power of Dogu'. One of the exhibits was from the possession of the Anthropological Museum of Nanzan University. This dogu of great antiquity, excavated from Hanawadai Shell Midden, is famous for its good condition, and we had many occasions to publish photos of it.

This time we had a good chance to consider the dogu itself and the possibility of exhibition of dogu at museum. To prepare for the loan, we made a further survey of the dogu in order to make precise drawing and photos. Unfortunately, I could not look at the exhibition in London, but had a chance in Tokyo. From the survey of catalogues of both exhibitions, I found that there are three perspectives on dogu at museum; people may look at the dogu objectively, internalize the time and people of the Jomon period by looking at the dogu, or look at visitors who are looking at the dogu in many ways. I suppose that there can be further perspectives which would enrich the circumstance of museum.

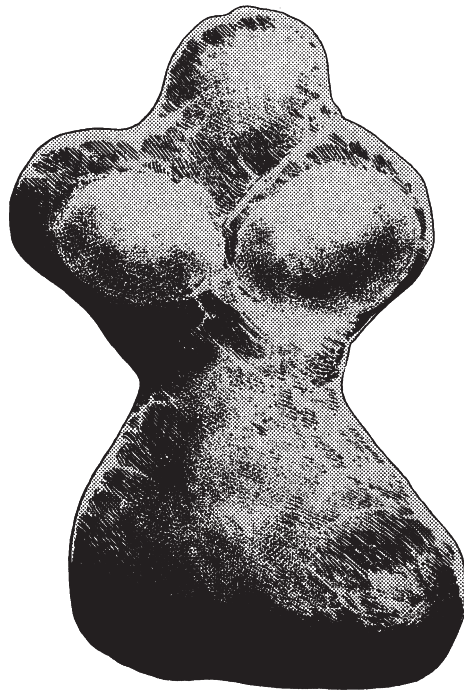


第1図 花輪台貝塚土偶実測図（縮尺：実大）



写真1 花輪台貝塚土偶（縮尺：正面・背面・側面はほぼ実大、他は不同）

— 今からおよそ六〇〇〇年前の日本列島の
人々の心が、そこにある。日本ではこれから
先、さらに約四〇〇〇年間にわたる縄文文化
|| すなわち日本型の新石器文化が本格的に展
開するのだ。



註 小型土偶（高4.8cm）は茨城県花輪台遺跡出土。

第2図 歴史マンガの中の花輪台貝塚土偶（石ノ森1993より）

平成 22 年 3 月 23 日 印刷

平成 22 年 3 月 26 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 28 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

TEL 052(832)3111 (代表)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町 19-20

TEL 052(871)9190